
ハル・エスクリダオンの夢

風月加保留

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハル・エスクリダオンの夢

【Nコード】

N7827U

【作者名】

風月加保留

【あらすじ】

とある世界で、起きた出来事。この世界最強の魔法使いハル・エスクリダオンが失踪した。

この世界全体がこのことに混乱している最中、この世界の魔法学校の名門と呼ばれるプリマヴェーラ学園を中心に黒い陰謀が動き出していた。

序章 失踪

誰も知らない異世界。魔法使いがいて、魔物と人間が生きている世界。

この世界で、今。最強の魔法使いと歌われている、ハル・エスクリダオンが失踪した。

そのことは、世界全体に知れ渡り、世界を驚愕させた。ハルは、最強の魔法使いで今現在この世界で彼女に肩を並べる存在がいなかった。その為、簡単に殺されることも消されることも不可能だった。そもそも何故、ハルが失踪したとわかったのか。

実は、ハルの付き人でありパートナーであったアラン・ウィルードが失踪したと発表したのだ。

アランはいつも通り朝八時に、ハルの大きな屋敷に向かった。しかし、チャイムを鳴らしても反応がなかった。寝ているのかと思い、持っていた合鍵でハルの屋敷に入る。一人暮らしにしてみてもは大きく広い屋敷。初めて来た人は必ず迷子になってしまいそうな壮大な屋敷にアランは、慣れた足取りでハルが寝ている筈の部屋に向かう。ハルがいる筈の部屋に着き、部屋のドアをノックした。しかし反応がなく、アランはドアを開ける。部屋の真ん中に位置するベッドまで一直線に行き、掛け布団を剥いだ。

「ハルさん。いい加減、起きてくだ…」

寝ているはずのハルがいなかった。もう起きているのかと思ったアランは、屋敷中ハルを探し回った。だが、見つからなく代わりに見つかったのは魔法使いに大切な魔石ませきと魔法箒だった。

この二つがないと、魔法使いにとっては命取りだった。魔石は魔法の発動を速めるための道具で、魔法箒は魔力を使わなくても簡単に飛べる。

アランは急いでハルを探し始めたが、見つからなかった。様々な方法を試してみたが、結局ハルの行方は掴めないままだった。

ハルがいなくなったと知って、世界は混乱するだろう。きっと、邪悪なる者がこの機会にこの世界を壊しに行くだろう。とアランはハルの失踪を伝える前にそう考えた。しかし、却って伝えないと事態は悪い方向に行く可能性が高い、と判断したアランはハルの失踪を伝えることに決めたのだ。

そう判断して一ヶ月が経つアランの元に、ハルが現れるまで最強だと言われ続けた魔法使いから呼び出しが掛かった。その魔法使いの名前は、ビビック・ワベツテ。アランが一番苦手とする性格の持ち主で、ハルのことを嫉妬で罵っていた。

アランは、憂鬱になりながらも魔法箒に乗りながらビビックが暮らす街へと向かって行った。ビビックの住む屋敷はハルの屋敷とは比べ物にならないくらいに広かった。村一つの面積は超えているだろう。

ビビックの家に着いたアランを出迎えていたのは、ビビックが雇ったメイドではなくビビック本人だった。いつもは、メイドが出迎え客室まで案内されるが、今回はビビックが人を瞬間移動させる瞬間魔法を使いいつもの客室ではなくビビックの部屋だろうと思われる畳が敷かれた場所に飛ばされた。靴はいつの間にか脱がされ、ビビックは十秒の差でこの部屋に現れた。そして、現れてすぐにビビックはアランに言葉を投げた。

「エスクリダオンが失踪したとは、どういうことだ？ 奴は、そんなヘタレではないと思うんだが。俺は、超える魔法使いがそう簡単に消えるとは思えない。そう、思えない。絶対に。アラン。本当に見つからないのか？ 唯に魔力を消して、隠れているとかそういうレベルじゃないのか？」

「いえ…違います。そういうレベルじゃないから、困っているんです。ええ、本当に。それでも、僕。魔力探知に関しては天才と呼ばれています。僕自身も、魔力探知には誰にも負けない自信があります。まあ、他の分野はダメですが」

魔力探知。人の気配と同等で、魔法使いが魔法使いや魔物を探す時に使う搜索魔法の一つ。簡単そうに見えて難しく、搜索魔法の最高峰と呼ばれている。尚、搜索魔法というのは人を捜すための魔法の総称。

その魔力探知に優れていたアランは、ハルの付き人兼パートナーになれたと断言しても良かった。

「そうか…。魔力探知の天才アランでも、ダメか…」

ビビックは諦めたように呟いた。アランは、何を言えばいいのかわからずに黙ってしまった。

沈黙。小鳥のさえずりが聞こえ、庭の大きな池の鯉が、水を跳ねる音も聞こえる。ビビックは、考えことをし始めた。アランはただ俯いて、黙っていた。その状態が長く続いたかに見えた。しかし、考えことをしていたビビックが突然に口を開いた。

「アラン。俺は、君に頼みごとがある」

「頼みごと？」

「エスクリダオンに関係することだ」

「それ、本当ですか！」

「本当だ」

今まで暗くなっていた瞳の色が一瞬で明るくなったアラン。その様子に、ビビックは優しそうな瞳を一瞬だけ見せた。

「プリマヴェーラ学園は知っているか？」

「ええ、もちろん。この世界の魔法学校で名門中の名門です。それがどうかしたんですか？」

「実は、エスクリダオンが失踪する前からだが、プリマヴェーラ学園に怪しい動きを見せる連中がいる。その連中の動きを、プリマヴェーラ学園に侵入した時から俺は見張り、いつでも倒せることが出来たが、まだ悪いことはしてない。下手に動いたら、こっちの負けだ。それで、俺はしばらく泳がせた。二年ほど、静かだったがエスクリダオンが失踪したと聞いてから、活発に動き出した」

「それで、僕にどうしろと、ビビックさんで倒すことは可能でしょ

う」

一ヶ月後に還暦を迎え、ハルに最強の魔法使いの座を奪われ、現役から退いた身であるビビツク。しかしハルが出てくるまで、最強の魔法使いと呼ばれていたのだ。倒すことは簡単であろう。性格や態度が悪くても、現役を退いた身であっても、ハルと同じで最強であることは変わりがない。そう言う立場であるビビツクが、いくら魔力探知の天才とはいえ、他の魔法は全くできないアランに頼むとは何事だろうか。

「アラン。お前は、いくつだ？」

「え、年齢のことですか？」

「そうだ」

「十五です」

「プリマヴェーラ学園に入学できる年齢は？」

「今年の三月の終わりまでに、十五歳になっっている者です」

「アラン。他の魔法は苦手だろう。まあ、お前さんの生い立ちを聞けば、魔力探知だけ特化している理由は分かるが。流石に、他の魔法の出来は酷過ぎる」

アランは何か嫌な予感がした。普段は、年齢の話はあまりしないビビツクがしているのだ。嫌な予感がしないわけではない。

「…ビビツクさん。まさかとは、思いますが…」

「アラン。俺が、プリマヴェーラ学園に侵入しても、奴らに勘繰られ事態が悪化する可能性がある。しかし、アラン。お前は、魔力探知以外はダメダメな十五歳だ。いくら、エスクリダオンの付き人兼パートナーだとは分かってても、年齢と他の魔法の出来で、普通に入学したと思うだろう。手続きはもう済んでいる。奴らの動きを見張るためにも、お前自身の勉強の為にも行って来い！」

アランの言葉を無視してビビツクは話を終えた。アランはビビツクの性格上断れないと判断した。

「…分かりました。ビビツクさん。僕。プリマヴェーラ学園に通います。でも、それがどうしてハルさんと関係があるんですか？」

一通りの話を聞いてアランは疑問に思ったことを聞いた。いくらハルが失踪したと聞いてから動きが活発化しただけでは、ハルに関係があるわけではない。

「実は、エスクリダオンは奴らを倒すためにプリマヴェーラ学園に侵入したと思われる。奴らは、君が思っている以上に強く、エスクリダオンも簡単には手が出せない大きな組織だ。エスクリダオンがどういう形で、学園に入ったのか不明だ。ただ、エスクリダオンが学園にいることは確かだ」

ハルに関係があることがわかったが、アランは疑問がまた生まれた。

「でも、ハルさんはどうしてそのことを話さなかったんだ？」

ぽつりと小さく呟いた。ビビックに聞こえない様にしていたが、ビビックは自慢の地獄耳でアランが呟いたことを聞いてしまった。

「多分。エスクリダオンは、君を巻き込みたくはなかった理由もあると思うが。奴らにプリマヴェーラ学園に入ったことを悟られない様にするためだろう。失踪したのは、その理由からだ」

自分の呟きが聞こえてしまった、とアランは一瞬焦ったがすぐに答えが返って来たことに意味を表すと落ち着いていた。

そのあと、ビビックはアランにプリマヴェーラ学園の説明を受けた。それで分かったことは、ビビックはプリマヴェーラ学園の卒業生だった。

アランは家に帰ると、プリマヴェーラ学園に持っていく必要なものを揃えた。

それと、アランがプリマヴェーラ学園に入ることは、半年前から決まっていたらしくハルの失踪なくとも、入学させられていたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7827u/>

ハル・エスクリダオンの夢

2011年7月13日03時39分発行